

東京外国語大学アジア・アフリカ研究所

共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」研究会報告

「アフリカ史研究の『リオリエント』再訪」(“Re-Orient” of Africanist Historiography Revisited)

北川勝彦 (関西大学)

## 1 序—本報告の課題—

まず、本報告にあたって、その背景について話しておきたい。

本報告者が、本共同研究課題「アフリカ史叙述の方法にかんする研究」にかかわって活用してきた史料には、以下のものがあった。添付資料「報告者の著作リスト(2008年以降)」に見られるように、第一は、19世紀の南アフリカの経済史を研究するにあたって利用した「ケープタウン商業会議所史料」およびジョハネスバーグのスタンダード・バンク・ヘリテージセンターに収蔵されている「スタンダード・バンク活動報告書」(北川 2010①)である。第二は、植民地期南部アフリカにおける風景(landscape)、具体的には南ローデシア(現在のジンバブウェ共和国)南西部のマトポヒル(Matopos Hills)をめぐる風景認識を検討した際に活用したいくつかのトーマス・ベインズ(Thomas Baines)の絵画である。

(北川 2008) 第三は、18世紀末から19世紀中葉にかけてロンドンの王立植物園(Kew Gardens)から南アフリカに派遣されたプラント・ハンターたちの活動、具体的にはジェームス・ボーウィ(James Bowie)とロバート・プラント(Robert Plant)について研究した時に活用した植物の絵(Botanical Art)と彼らの旅行日誌(Journal)である。(北川 2015①) 第四は、19世紀南アフリカのナタール植民地における初期の鉄道建設について研究した時に利用したナタール植民地議会資料である。(北川 2015②) 報告者は、これ以外に長年にわたってアフリカと日本の通商関係史の研究に従事してきたが、その際に活用した資料が戦前期日本の「領事報告」であった。これについては、本共同研究でとりあげる資料としては適当かどうかにはわかには判断できないために参考文献リストからは削除している。

周知のようにアフリカは、近年、大きく変貌している。21世紀に入り経済成長も持続的となり、54か国を数えるアフリカ諸国の中には、経済成長率の点で世界トップ10か国の半数を占める状況となってきた。もちろんアフリカ諸国間およびアフリカ各国の内部においては著しい格差が存在することは事実であるが、近年のアフリカ大陸全体の台頭と非アフリカ世界との関係の新展開には著しいものがある。アフリカ連合(AU)は、1963年に結成された「アフリカ統一機構」(OAU)50周年をむかえるにあたり、21世紀中葉以降を見据えた「アジェンダ2063」を策定し、今後のアフリカの進むべき方向を示した。(AU 2015)

翻って、近年の日本とアフリカとの関係の動きを見たとき、注目すべき関係の枠組みとしては「東京アフリカ開発会議」(TICAD)をあげることはができる。本会議は、1993年に設置され、これまで5年に一度日本国内、具体的には東京と横浜で開催されてきた。しかし、最近の国際関係の変動とアフリカの台頭を考え、2015年2月に政府は新しい「開発

協力大綱」を策定し、アフリカについては「アフリカ開発会議（TICAD 6）」（2016年）の新枠組で対処することを決定した。すなわち、これまでと異なり、アフリカ開発会議を3年に1回、日本とアフリカのいずれかの国と交代で開催することになった。本年（2016年）8月には、ケニアのナイロビでこの新枠組に基づいて会議が開催された。こうした動向は、日本とアフリカの関係、広くは東アジアとアフリカの関係の在り方を再考する必要性を迫るものであった。

現在をどのように理解するかは、それぞれの立場の違いや意識する時間の取り方によって異なるであろう。しかし、19世紀末から21世紀の始まりにいたる「長い20世紀」をとって見たときに、「現在」は、「長い20世紀」と「新たな長い一世紀」への移行期と考えられるであろう。（Freund 2005）従って、アフリカの歴史研究に関わる「アフリカニスト」と「アフリカニストの歴史研究」も「再定義」あるいは「再概念化」が求められているようにも思われる。（Freund 1998）

本報告では、以上の背景を踏まえて、「アフリカ史のアフリカ化」（Africanization of Africanist Historiography）、世界史と「アフリカ史の中心化」（Centering Africa, Moving the Center）およびアフリカ史研究の歴史学（研究）への貢献あるいは確固とした歴史学を基盤とした「アフリカ史研究の構築」（Historicizing African History）について以下で考察する。

## 2 「アフリカ史のアフリカ化」

歴史研究については、これまでもしばしば議論されてきた問題として、考察あるいは分析の「時間単位」と「地域（分析）単位」があげられる。時間単位の取り方としては、たとえば10年、50年、500年、1000年などが考えられるであろう。また、分析単位としては、ごくミクロな地域（local）、そうした地域を含むやや広い地域（regional）など取り上げ方もさまざまである。

そこで、今、「長い20世紀」という時間単位を想定してアフリカ史の展開を考えてみると、そうしたタイムスパンで浮かび上がってくる最も重大なアフリカ史の問題としては、「植民地支配の衝撃」（colonial impact）という実に刺激的な現象に行き当たる。これまでもこの問題をめぐっては膨大な研究史が蓄積されてきたことはアフリカ史に少しでも関心をもった研究者であれば周知のことであろう。（A. Adu Boahen 1982）この衝撃の解釈をめぐっては、大きく分けると非常に重大かつ深刻な影響があったとする“epic paradigm”とアフリカの展開にとってさほど大きな影響はなく長い歴史の一エピソードにすぎないとする“episode paradigm”が見られたことはよく知られている。こうした解釈の相違は、各論者がアフリカ史の現在、現在のアフリカをどのように見るか、その「現在意識」（present mindedness）の違いによって生じるのであろう。この論争は、現在も決着がついたわけではない。

また、この解釈の相違は、アフリカ（史）あるいはアフリカと非アフリカとの関係（史）

の「表層」(地表面)と「深層」の「断面」の断片化を修復する多様な途を示すことでアフリカ史へのアプローチのアフリカ化を進めることと軌を一にしている。

たとえば、最近 100 年間のアフリカの歴史を考えるにあたってアフリカにおける「国家と民族の不一致」を「国家史(誌)」の問題として議論される場合がある。(Young 1994, 2012) それを象徴する表現としては、『ベルリン会議の呪い』(Curse of Berlin Conference) (Adebayo 2008)や『国民国家の呪い』(Curse of Nation State)(Davidson 1992)という表現が使われてきた。すなわち、現在のアフリカ諸国については、1884年～85年にベルリンで開催された「ベルリン西アフリカ会議」において、当時のアフリカの諸民族の意向とはまったく関係なくヨーロッパ諸国の競合する利害を調整するために恣意的にその境界が決定された。したがって、ある民族が複数の植民地国家に分断された場合もあれば、複数の民族がある植民地国家に統合されるという事態が発生した。このような民族と国家の不一致という現象は今日に至るまでアフリカにおけるさまざまな紛争の原因の一部となっている。このような「断片化されたアフリカ」(fragmented Africa)史とは異なる「アフリカ史」のオルターナティブをどのように描き出すか、これは、「アフリカ史のアフリカ化」とつながる非常に興味深い歴史的課題といえるであろう。(注 たとえば、アフリカ政治研究のアフリカ化への取組の一例として川端正久と落合雄彦のプロジェクトをあげることができる。川端・落合 2006)

### 3 世界史と「アフリカの中心化」

次に、歴史学一般、あるいは世界史、また、最近ではグローバル史とアフリカ史の関係をどのように理解するか、その場合にどのようにアフリカ史を位置づけるか、という課題について検討する。

ごく最近にいたるまで、アフリカは世界(国際社会という場合もある)によって無視されたり、お荷物扱いされてきた。今日にでも、学校教育で使用される教科書にアフリカの記述はどれくらい出てくるだろうか。われわれの目にする新聞や雑誌などにどれほどアフリカの記述がみられるか。また、見られたとしてもどのように扱われているか。人によって印象は異なるかもしれないが、アフリカ史研究に携わるものからは再考を促したい点が数多くみられる。

川端と落合を中心にした「アフリカと世界」プロジェクトにおいて、川端は、世界のアフリカ論を振り返って、それを「アフリカ無視」論⇒「世界におけるアフリカ」論⇒「世界とアフリカ」論への展開として整理した。(川端・落合、2012)これをアフリカ史研究に置き換えて考えるならば、「アフリカ史不在」論⇒「世界史におけるアフリカ史」論⇒「アフリカ史と世界史」論への展開として理解することができるであろう。その場合、アフリカと世界の「つながり方」やアフリカが「つながってきた世界」をアフリカ史の立場からどのように理解するか、が重要な課題になってくると思われる。それに加えて、ヨーロッパ主軸の「ユーラシア」(Eurasia)あるいは「ユーラフリカ」(Eurafrica)という地域概

念や地域意識からアフリカ主軸の「アフラシア」(Afrasia) (Mazrui& Adem, 2013) ,あるいは「アフリユーロ」(Afreuro) への観点の思い切った移行ないし旋回 (view shift, view revolve) が求められることになるであろう。

しかし、このような観点ないし思考の旋回の試みがすでに始まっている。たとえば、日本史・アジア史研究とアフリカ史研究の接続を図ろうとした試み(北川 2002)、また、国際関係(史)研究の「歴史化」"historicization"と「文脈化」"contextualization"を図ろうとした「アフリカとアジアの絡まりあい」(Africa and Asia Entanglements in Past and Present) プロジェクトは、国際関係(史)研究を「浅い歴史」(shallow history) から「深い歴史」(deep history) に向け、また、世界史あるいはグローバルな歴史理解の枠組みについてアフリカを軸に「大西洋システム」(Atlantic System)からインド洋システム」(Indian Ocean System) に移行させようという試みであった。(Cornelissen and Mine, 2014, Kitagawa, 2016)

「アフリカ史のアフリカ化」と「世界史とアフリカ史の『中心化』」に必要な考え方としては、主体としてのアフリカがこれまでの歴史の中で取り組んできたことがどのようなものであったか、次の点に注目しながら明らかにすることで進むべき道が見出されるのではないだろうか。第1は、アフリカが自らの文化、スキル、資源をどのように活用してきたのか、すなわち"indigenization"の歴史である。第2は、外来のさまざまなものを現地の必要にあわせてどのように利用してきたのか、すなわち"domestication"の歴史である。第3は、アフリカが自らの多様性を活かしながら他の世界や地域とどのような多様な関係を取り結んできたのか、すなわち"diversification"の歴史である。第4は、アフリカと同じような水準や状況に置かれている地域との水平的な相互浸透 (horizontal interpenetration) の歴史である。アフリカ史の展開の中で以上のような側面を描くことで、アフリカ(史)の断片化(周辺化)を克服する歴史像が描かれるかもしれない。(Mazrui 2013)

#### 4 「アフリカ史のアフリカ化」の準拠枠組—T.O. Ranger, *Emerging Themes* 再訪—

それでは、前節で示唆した「アフリカ史のアフリカ化」の進展度を測る準拠枠組として、今からアフリカ史研究で世界的に知られたテレンス・レンジャー (T.O. Ranger) が、50年ほど前に自らの編著『アフリカ史の形成期の課題』(Ranger 1965)において提起した課題を再考することから設定してみたい。この課題については、後年、アティエノ・オディアンボによっても提起されている。(E.S. Atieno-Odhiambo 2002)

50年前にレンジャーは次のような二つの問題を提起した。第一は、「アフリカ史は自らの必要にふさわしい方法とモデルを開発してきたのか、別の分野(場所)で開発された方法とモデルの活用に依拠してきたのか」という問題提起であった。第二は、「アフリカ史の言説(研究)の主要なテーマはアフリカの歴史的発展の動態から生まれたのか、他の地域における歴史研究にとって重要であるという理由で外部から課されたのか」という問題提起であった。(Ranger 1965)

第1は、アフリカ史研究の方法とモデルおよび利用可能な資料の問題である。

アフリカ史は、これまでも考古学、オーラルおよび文書の各資料に依拠して研究が進められてきた。したがって、これらの資料にかかわる既存の研究手法の修正と範囲の拡大が常に求められてきた。しかし、考古学資料に基づく研究成果は、同じ課題を対象とする他の学問の成果との比較検証が求められるし、オーラル資料については対象地域の特定のオーラル・ヒストリー研究がどの程度の代表性と確実性を有するのか、常に検証されねばならない。

また、アフリカニスト史家は、自らの対象を究明するための資料には常に制約があり、資料に向き合う歴史家がそれとどのような関係性に置かれているのか、そこから生まれる成果に歪がないように克服する努力が求められてきた。

加えて、アフリカ史の展開にはイスラームの拡散が大いに関係している。そこで、古くから残されてきたイスラームの歴史資料の利用可能性に道を開くと同時に、それを活用して生まれるアフリカ史像にいっそう敏感になる必要がある。

さらに、アフリカにおける史実を解釈したり、分析するにあたって、これまでヨーロッパで進化した歴史の分析概念や方法が用いられることが多かったが、はたしてこれがどの程度の妥当性を持つものなのか、検討する必要がある。

アフリカ大陸の歴史は、人類の発展史とは異なるもので著しく特殊なものなのか、あるいは人類の一般史と共通性を有するも何なのであろうか。世界史においてアフリカ史の特殊性や多様性を強調するのが常となっているが、アフリカ史の **generality** と **particularity** の関係性をどのように考えるかという課題が残されている。

報告者は、アフリカ史においてはどのようにすれば「言あげできない人々」”**the History of Inarticulate**”を歴史の担い手として記述することが可能か、アフリカ史研究において一層議論すべき課題ではないかと考える。

第2は、アフリカ史の主要なテーマに関する問題であった。

「アフリカ史のアフリカ化」をめぐる重要な問題の一つに、アフリカ史研究でとりあげられてきたテーマがはたしてアフリカの歴史的ダイナミズムの中から生まれ、それを明らかにするうえで意義のあるものであったのか、がある。これまで取り上げられてきたテーマとしては、アフリカの奴隷貿易と植民地支配の本質とそのインパクトをどのように理解するかというものがあつた。それと並んで植民地化過程におけるアフリカ人の対応 (**response**) と関与 (**involvement**) の研究が行われてきた。植民地支配に関する研究はさまざま角度から重ねられてきたが、アフリカ人の経験の歴史的研究はなお一層必要であろう。これについては、植民地を有した旧宗主国側のアーカイブよりもアフリカ諸国のアーカイブに収められている諸資料から多くの事象を捉えることが一層求められる。

「アフリカ史における宗教」というテーマは今日でも重要である。宗教史においてアフリカ人の宗教システム (**African religious system**) がどれほど取り上げられているのかは定かではないが、アフリカ史研究においては、近年、さまざまな研究成果が現れている。

歴史家がアフリカの宗教という課題に取り組むとすれば、人類学、民俗学、missiology (practical theology)(キリスト教ミッションの活動)の諸研究に依拠するとともに、アフリカ人社会の宗教概念にみられる多くの重要な変化、アフリカ人の宗教の組織構造や宗教と政治システムの関係性の変化について研究が求められる。(阿部・小田・近藤 2007、落合 2009)

アフリカの文化史 (intellectual and cultural history) も重要なテーマである。アフリカの文化史研究、あるいは観念 (思想) の歴史的研究 (historical studies of ideas) は、その研究成果をあげるには困難な面もあるが、アフリカの宗教の歴史的研究と同様に重要なものであることは間違いない。

アフリカ史の重要なテーマとして、アフリカにおけるキリスト教とイスラームの広がりやインパクトの研究を忘れるわけにはいかない。アフリカ史研究においてミッションの歴史 (mission histories) はヨーロッパ人のイニシヤティブの立場からの研究と並んでアフリカ人のレスポンスに関わるミッション・ヒストリーの研究も現れている。アフリカ人のイスラームに関する研究は数多くみられるが、社会、経済および政治の発展という社会全体の一部としてイスラームの展開の歴史を捉える研究がもっと現れてもよいであろう。(Robinson, 2004)

アフリカ人は植民地支配に対して黙っていたわけではない。アフリカ人の初期の抵抗 (primary resistance) 運動と後のナショナリズムの運動の連関の問題は明らかに一つの重要なテーマである。大きな抵抗によっておこり、それと結びついて生じた社会変化 (変動) も問題も同様である。また、なぜある社会は抵抗し、別の社会は抵抗しなかったのか、「協力」と結果と「抵抗」の結果とは何が異なったのか、これらも興味深い問題である。少なくともこの分野の研究は、アフリカ人の大きな抵抗を 19 世紀のアフリカ史、アフリカ社会のダイナミズム、アフリカ人の生存の政治学を理解する方法として活用する方向に進化してきた。(Ranger 2012)

アフリカ史家には政治学者、社会学者および経済学者との対話がますます必要となっている。アフリカ史研究において取り上げられるテーマによっては、これらの研究は決定的に重要な役割を演じるであろう。この分野の研究者は、「開発研究」(development studies) に向かっている。歴史家たちも、新たな資料と異なるアプローチで政治学者や経済学者が議論してきた問題を検討し、両者は開発史 (development history) を舞台にしてそれぞれの研究成果を交流させるべきであろう。(Kitagawa 2016)

しかし、以上のアフリカ史研究における各テーマの研究を通して取り組まねばならないのは、優れた歴史研究の確固たる基盤にたつてアフリカ史を確立することを意味する「アフリカ史の歴史化」(historicization of African history) である。(Ranger, 1965) 必要なことは、以上にあげた各トピックの研究にアフリカニスト史家としての努力を傾注する他に道はない。

## 5 UNESCO『人類の歴史』(History of Humanity)に見られるアフリカ史の位置

UNESCO 憲章の最後には、「当事国は、世界の諸人民の教育、科学及び文化上の関係を通じて、国際連合の設立の目的であり、かつ、その憲章が宣言している国際平和と人類の共通の福祉という目的を促進するために、ここに国際連合教育科学文化機関を創設する」と記されている。UNESCO では、人間が、年齢に関係なくどのようにして個人的にも集団としても人類の文化と科学の発展を認識してきたのか、その歴史を描くためにこれまで 2 回にわたって人類史が企画された。

第 1 は、*History of Mankind : Cultural and Scientific Development* のシリーズであった。1950 年にこの企画を実現するために国際委員会 (International Committee) がされ、この委員会の下に Correspondence Member 国が任命され、さらに Editorial Committee (委員長 Ralph Turner, Yale University) が設置された。編集委員会の勧告に従って各巻の責任編集者が任命された。その後、ようやく第 1 巻が出版されたのは、1963 年のことであった。本シリーズは、全 6 巻の構成であったが、その章別構成を見る限り、アフリカが登場するのは、別紙 (*History of Mankind : Cultural and Scientific Development*, UNESCO 概要) に見られる通り、わずかな紙幅にとどまっていた。

第 2 は、*History of Humanity : Scientific and Cultural Development* のシリーズである。国際協力の下で真に普遍的な著作を刊行することを目指して、「人類の歴史の科学のおよび文化的諸側面、人民と文化の相互依存、共通の遺産への貢献について広い理解に供する」ために出版された前シリーズ (*History of Mankind : Cultural and Scientific Development*) が完成した 1969 年、第一次国際委員会委員長 Paulo de Berredo Carneiro は次のように語った。「我々が書いてきたことが置き換えられる日が訪れるだろう。我々の後継者がこれに関わり、我々が始めた著作の改訂版が新しい千年紀の夜明けに出版されるかもしれない。」

その後、1978 年に開催された UNESCO 総会においてこのプロジェクトの継続が決議され、1979 年に第二次国際委員会が開催された。前シリーズと同様の組織化がすすめられたが、このシリーズは前シリーズ (*History of Mankind*) とは異なり、*History of Humanity* と称されることになった。後者は、多様な文化のおよび科学的成果という観点から人類史を編纂するという点では共通しているが、前者の単なる改訂版ではなく、前者よりも多様なテーマと広い範囲にわたる地域を網羅している点で異なる。

前シリーズが改訂されるにいたった理由としては、1960 年代以降の研究方法の発展、歴史記述が人類の知識のレベルを引き上げるうえで演じることができる役割の変化があげられる。歴史の記述 (writing) と書き直し (rewriting) は、新しい資料・データが利用可能になったためにあらゆる変化の意味づけと評価がかわることに関わっている。

このシリーズの編集にあたっては、国際委員会と編集委員会で多種多様な議論が展開されたが、最終的には、7 巻構成とし、各巻にそれぞれ一つの時期を割り当て、その中にテーマを論じる部と地域を説明する部の 2 部構成とされた。また、時期区分については、ローマ帝国のキリスト教化を古代の終わりとするヨーロッパ史の時期区分 (western

traditionalism) に準拠することには疑問が提起され、ムハンマドの遷都 (Hegira) を重要な歴史の変わり目として位置づけるなどの工夫があった。そこで、まず、人類史 (あるいは世界史) の大転換期にあたる時期を 16 世紀から 17 世紀の **grand discoveries** と考えて、これに 1 巻を当てることにした。その時代に続く変化の歴史に 2 巻 (19 世紀と 20 世紀)、それに先立つ人類の誕生から 16 世紀までの歴史に 4 巻を当てることにしたのである。

別紙 (*History of Humanity : Scientific and Cultural Development*, UNESCO 概要) に見られるように、全 7 巻の各巻の構成において多種多様なテーマが論じられ、地域を説明する部門でもアフリカ史に関する記述が前シリーズと比較して格段に増加していることがわかる。本報告では、このシリーズに見られるアフリカ史記述の分析は今後の課題としておきたい。ただ一点だけ指摘すれば、本シリーズは、**local** あるいは **regional** な歴史との関連で利用されているデータは役立てられるであろうが、どのデータのどの部分が人類共通の歴史的遺産にかかわっているのか、グローバル・ヒストリー (**global history**) の精緻化という点で有益かどうかはにわかには判断できない。

## 6 アフリカ史研究の新展開

以上に述べてきたように、アフリカ史研究においては、地域間の比較を拒むような地域的例外主義には反対できないが、かといって各地域の歴史的経験の差異性を認めないというわけにもいかない。逆に、各地域の特性を認めるにせよ、世界全体を理解する方向性を見失ってはいけない。以下では、そのような点を考えさせる近年のアフリカ史と世界史の研究動向について簡単に紹介し、本報告者の責の一端を果たしたいと思う。

第一は、アフリカ史家にはアフリカの過去をグローバルなコンテキストに位置づけることが求められている。

アフリカ史と世界史はそれぞれ第二次世界大戦後の歴史研究の重要なフィールドとなってきた。アフリカ史は 1950 年代と 1960 年代に急速に構築されたが、その時代は、近代化 (**modernization**) 思想に支配された時代であった。世界史は、1990 年代までゆっくりと発展してきたが、その後、急速に拡大し、グローバル化 (**globalization**) 思想の時代になって歴史研究の一つの拠点となった。アフリカ史と世界史というこの二つの研究領域は、時間と分析単位においても歴史研究の広がり多様性を考えさせるものである。ただ、言えることは、世界史家はアフリカに一層注意を払うべきであるし、アフリカ史家はアフリカの過去をグローバルなコンテキストに位置づけるために多くのことに取り組まねばならない。

(Patrick 2013)

第二は、アフリカ史を「トランスナショナル史」の立場で説きなおすことが検討されつつある。

最近のグローバル・ヒストリーとは少し立場の異なる帝国史ないしトランスナショナル史の立場でアフリカ史を位置づけ、アフリカ史をこの視点から説きなおすべき時期にきている。



多面的であるが、それにもかかわらずローカルな側面に基盤を置いている一つの歴史分野として、「トランスナショナル史」は帝国史の旧来の方法とは一線を画している。帝国史はアフリカを植民地化する側の歴史のための背景としてアフリカを扱っているにすぎない面がある。もっとも近年では、帝国史に対する批判的アプローチが指摘されてはいるが、まだ十分には追求されていない。すなわち植民地化する側と植民地化される側が歴史の同等の主体としてまた分析対象として扱われていないのである。しかし、アフリカとディアスポラの歴史は、トランスナショナルな歴史をめざすものにとって重要なものであった。それにもかかわらずトランスナショナル史には、それが乗り越えようとしている植民地化する側とされる側の間の境界を再生産するリスクを常にともなっていた。帝国によって構造化された世界の中から帝国の外側を考察するために必要なことは、歴史家たちが批判的な理論をすすんで受け入れることであるが、多面的な歴史学研究の根拠と矛盾しない方法をのなかで考える必要がある。(Zimmerman, 2013)

以上は、アフリカ史全体について考えるべき一つの問題を提示したのであるが、報告者がこれまで多くの時間を割いて研究してきた南アフリカ史研究の最近の動向とのつながりについて検討しておく必要がある。

第一は、南アフリカ史をアフリカ大陸の地域間の交流とトランスナショナルな循環の中で解明する必要があるという指摘である。

グローバル史と世界史に関する最近の論争はヨーロッパとアメリカの学会のみならずアジアの学会においても大きく展開されている。そうした動きは旧宗主国とアフリカ諸国の大学の間で広がりつつある断絶（懸隔）を一層深めるような一面として見られる向きもある。しかし、ポストアパルトヘイト期の 20 年間にはアフリカ大陸全体で人々と思想のこれまでよりも自由な移動ができるようになった。こうして生まれた新しい研究者のネットワークは、アフリカ大陸内の地域間の交流やトランスナショナルな循環を解明する新しいプロジェクトに火をつけたのである。このような事態の新展開は、南の世界の興隆と一致しており、また、グローバル・サウスをその母体として考える新しいスタイルの世界史の構築に機会を提供した。(Hofmeyer 2013)

第二は、南アフリカ史研究自体の視野の拡大が求められるようになった点である。

近年、南アフリカ史学会でいくつかの問題が提起されている。南アフリカ（南部アフリカ）史の視野を広げようとする動き、ナショナルな狭い視点からリージョナルな視点へ転換が見られる。(Carruthers 2014)

これまで南アフリカ歴史学会の会合はもっぱら国内で行われてきた。2013年6月27日～29日にハボロネのボツワナ大学で行われた南アフリカ歴史学会の会合は、この学会にとっては最初に南アフリカ国外で行われた会合であった。この大会は、南アフリカの歴史をナショナルヒストリーよりももっと広い観点から考え、南アフリカ史学自体の過去と未来を考える機会となった。南部アフリカ史学の巨匠パーソンズ (Neil Parsons) は、『南アフリカ史学雑誌』(*South African Historical Journal*) の巻頭論文で次のような点を挙げた。

第一に、一つの地域としての南部アフリカとは何か、そしてそれは何であったのか。第二に、南部アフリカ史の研究においてたとえば”ethnicity”というようにアイデンティティの過度に固定化されたカテゴリーを使うことには慎重であるべきである。第三に、Prehistory というような遠い過去を南部アフリカ史に組み入れると共にそれを歴史的な脈のなかで認識する (historicize) 必要がある。第四に、南部アフリカ史を東部アフリカやインド洋の結びつきの中で明らかにすることが重要である。第五に、帝国史と植民地史の顕著な持続的側面を明らかにする。第六に、大衆のキリスト教と近代社会の仲立ちをする”native agency”の役割に注目する。第七に、多面的な伝記として歴史を見ることや準小説的な歴史をあえて書こうとすることに加えて、学問研究の活動を広く知らしめるためにはメディアの活用も視野に入れるべきである。(Parsons 2014)

## 7 むすび

本報告を結ぶにあたって、以下の点を指摘しておきたい。

アフリカ史研究は、歴史学の研究対象の広がりに見られるように、空間と時間の多様な設定とならんで、グローバルな関連性を見ることを課題としなければならない時代に立っている。それ故に、日本人アフリカニスト史家は、世界と世界における日本の位置を十分に認識しながら、世界史およびアフリカ史の研究と教育の世界的運動に対して自覚的にかかわらなければならない。

## 参考文献リスト

- 阿部年晴・小田亮・近藤英俊編 (2007) 『呪術化するモダニティ—現代アフリカの宗教的実践から—』風響社
- 落合雄彦編 (2009) 『スピリチュアル・アフリカ—多様な宗教的実践の世界—』晃洋書房
- 川端正久・落合雄彦編 (2008) 『アフリカ国家を再考する』晃洋書房
- 川端正久・落合雄彦編著 (2012) 『アフリカと世界』(晃洋書房) [第2章「アフリカ史のグローバル化と人類史の再構築」] (58~91 ページ) [第3章「アフリカ経済史研究の回顧と新展開」(ギャレス・オースチン共著)] (92~119 ページ)
- 北川勝彦 (2008) 「植民地期南部アフリカにおける『風景』—Matopos Hills を中心にして—」関西大学『東西学術研究所紀要』2008年4月 51~69 ページ
- 北川勝彦 (2009①) 『脱植民地化とイギリス帝国』イギリス帝国と20世紀 第4巻 (ミネルヴァ書房) [総論 脱植民地化とイギリス帝国] 1~21 ページ [第2章 イギリス経済史の黄金時代と脱植民地化] 69~110 ページ [第10章 イマジネーションの脱植民地化と文化] 393~429 ページ [コラム ウガンダの脱植民地化とアジア人の脱出] 311~314 ページ
- 北川勝彦 (2009②) 『海の回廊と文化の出会い—アジア・世界をつなぐ—』(橋本征治編、関西大学東西学術研究所) [移行期のインド洋経済圏におけるアフリカ人の移動] (101~135 ページ)

北川勝彦 (2010①) 「資料 19 世紀の南アフリカ経済史研究に関する史料—ケープタウン商業会議所史料とスタンダード・バンク史料について—」(龍谷大学 『社会科学研究所年報』 40 号、101~115 ページ)

北川勝彦 (2010②) 『文化システムの磁場』(野間晴雄編、関西大学出版会) [移行期の西インド洋世界と東アフリカ海岸社会—モザンビーク海峡史研究の覚書—] (39~70 ページ)

北川勝彦 (2011) 『アフリカと帝国—コロニアリズム研究の新思考にむけて—』(井野瀬久美恵と共編)(晃洋書房) [序章 コロニアリズム研究の新思考にむけて] (井野瀬久美恵共著) 1~24 ページ

北川勝彦 (2012) 「アフリカ」『史学雑誌 2011 年の回顧と展望』(303~306 ページ)

北川勝彦 (2013①) 「アフリカ史 総説」 「前植民地期」(寺嶋秀明編『アフリカ学事典』昭和堂) (120~131 ページ)

北川勝彦 (2013②) 『アフリカ世界の歴史と文化—ヨーロッパ世界との関わり—』(共著) 放送大学教育振興会 3 月 30 日) 担当箇所、3、17—22、52—67、87—103、116—155、173—257、258—263 ページ

北川勝彦 (2014) 『現代アフリカ経済論』(高橋基樹と共編)(ミネルヴァ書房) [序章 アフリカはどのような大陸か] (共著) 1~31 ページ、[第 1 章 アフリカ経済の変遷と世界—近代以前の歴史—] (35~63 ページ)、[第 2 章 植民地支配とその遺制—その現代への影響—] (65~92 ページ)、[終章 アフリカ経済の包括的な開発に向けて] (共著) (353~379 ページ)

北川勝彦 (2015①) [第 8 章 南アフリカのイギリス人プラント・ハンターたち] (『ヨーロッパの歴史Ⅱ—植物からみるヨーロッパの歴史—』草光 俊雄・菅 康子編著、放送大学教育振興会) 105~124 ページ。

北川勝彦 (2015②) 「19 世紀南アフリカのナタール植民地における鉄道建設」 関西大学経済史研究会編『経済発展と交通・通信』 関西大学出版部、229~257 ページ。

Adebajo, Adekeye (2010) *The Course of Berlin : Africa After the Cold War*, Hurst & Co., London, 2010.

African Union Commission (2015), *Agenda 2063 : the Arica We Want*, Final Edition.

Akyeampog, Emmanuel Kwaku(2006) ed., *Themes in West Africa's History*, Ohio University Press, Athens.

Betts, Paul, (2015)“ Humanity's New Heritage : UNESCO and the Rewriting of World History “, *Past and Present*, No. 228, August, pp. 249-285.

Boahen, A Adu (1987), *African Perspective on Colonialism*,

Cooper, Frederick(2014) *Africa in the World ; Capitalism, Empire, Nation-State*, Harvard University Press.

Cornelissen, Scarlett and Yoichi Mine eds(2004)., *Africa and Asia Entanglements in*

*Past and Present*, Proceedings of GRM International Conference, Doshisha University, 2014

Davidson, Basil (1992) *The Black Man's Burden : Africa and the Curse of Nation-State*, Times Book.

Freund, Bill (1998) *The Making of Contemporary Africa : the Development of African Society since 1800*, 2<sup>nd</sup> edition, Macmillan.

Freund, Bill (2005) "Africa in the Long Century " in Jomo, K.S. ed., *The Great Divergence : Hegemony, Uneven Development, and Global Inequality*, Oxford University Press.

Hawks, Jacquetta et al., eds., *History of Mankind : Cultural and Scientific Development, Vol. 1 ~Vol.6*, UNESCO, 1963~1966.

Carruthers, Jane (2014) " To Rescue the Past from the Nation ; All for One, One for All ? Leveraging National Interests with Regional Visions in Southern Africa ", pp.207-216. *South African Historical Journal*, Vol. 66, No.2, ,pp.207-216

Hofmeyr, Isabel (2013) " African History and Global Studies : A View from South Africa ", *The Journal of African History*, Vol.54, No.3, November, pp. 341~349.

Kitagawa, K., (2016) *Africa and Asia Entanglements in Past and Present : Bridging History and Development Studies*, Asian and African Studies Group, Faculty of Economics, Kansai University, [ Introduction ] pp.1-3.

Laet, S.J. et al eds., *History of Humanity, Vol. 1~Vol.7*, UNESCO, 1994~2008.

Manning, Patrick (2013) " African and World Historiography ", *The Journal of African History*, Vol.54, No.3, November 2013, pp. 319~330.

Mazrui Ali A. and Adem, Seifuden, (2013) *Afrasia : A Tale of Two Continent*.

Parsons, Neil (2014) " Towards a Broader Southern African History : Backwards, Sideways, and Upside-Down ", *South African Historical Journal*, Vol. 66, No.2, pp. 217-236.

Ranger, Terence (2013) *Writing Revolt : An Engagement with African Nationalism, 1957-67*, James Currey.

Robinson, David (2004), *Muslim Societies in African History*, Cambridge University Press.

Young, Crawford (1994) *The African Colonial State in Comparative Perspective*, Yale University Press.

Young, Crawford (2012) *The Post Colonial State in Africa : Fifty Years of Independence, 1960-2010*, University of Wisconsin Press.

Zimmerman, Andrew, (2013) " Africa in Imperial and Transnational History : Multi-sided Historiography and the Necessity of Theory ", *The Journal of African History*, Vol.54,

当報告の内容は、著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.

別紙

No.3, November 2013, pp. 331~340.